

(6) 小都市における乳幼児歯科保健管理の経年

榑原 悠紀田郎	(愛知学院大学歯学部口腔衛生学教室)
石垣 晴男	(")
石井 拓男	(")
岩崎 浜子	(")
高山 陽子	(")

愛知県尾張旭市で実施しているフッ素塗布を中心とした歯科的な管理の効果は、その管理を早期に開始し、かつ指導及び予防処置を受ける回数が多い程高くなることを昨年報告した。

この効果の最も顕著に表われたのはA群(1才6か月時点から管理をはじめて6才までの7回にすべて受検し指導、フッ素塗布を受けたもの)と他のB～G群(2～6才時点でそれぞれ管理をはじめた群)の間の歯群別高度う歯罹患ブロック数の差であった。

しかしこの効果を上げるためには、毎年1名の歯科医師と7名の衛生士の臨床実習生が必要で、かつ幼児も1才6か月から6才迄の間7回の受診が必要となる。

このことから、先の効果を費用便益分析し、経済的な面から検討したので報告する。

(方法) 今回は直接費用(人件費)と直接便益(高度う歯にならなくて済んだブロック数、つまりA群:1才6か月スタートで6才まで7回出席とB群:4才以降スタートとの差)を求め比較した。

直接費用は昭和54年度の心身障害研究費補助金における賃金と謝金を当てた。

直接便益は、抜歯した場合をケース1とし、抜髄処置のう根～単根をケース2～4として現行の保険点数、及び愛知学院大学歯学部における一般料金を当て計算した。

(結果と考察) 子供1人あたりの直接費用及び直接便益は表1のように計算された。

費用対便益比は便益の算定方法により1:0.62～1.02の値となった。

この値は他のフッ素塗布方式の費用対便益比1:0.5～2.1の報告^①と良く似た値となり、ニュージーランドや米国のような飲料水にフッ素を混入した場合の便益比1:4.4～15.4^①よりはかなり低い値となった。

このことから、先に報告したような効果を生じた尾張旭市の事業は、費用便益的にはあまり効果的な事業とはいえないと考えられる。

文 献

① 前田信雄:保健の経済学, 東京大学出版会 1979

表1 尾張旭市における乳幼児歯科保健管理の費用便益分析

① 直接費用

- 1回当り人件費 Dr 9,000円 + DH 3,500円 × 7 = 33,500円
- 1回当り受診人数 50人 幼児1人当り670円
- A群はB群より5回余分に受診しているところから
 $670円 \times 5 = 3,350円$ ……………幼児1人当りの直接費用

② 直接便益

- A群の高度う歯ブロック数1人当り0.78ブロック
- B " " 1.16ブロック
- ∴ $1.16 - 0.78 = 0.38$ ……………幼児1人当り高度う歯にならずに
 済んだブロック数

ケース1. 抜歯+保険 = 1,000円 + 8,000円 = 9,000円

$$0.38 \times 9,000円 = 3,420円$$

ケース2. 3根抜髄+乳歯冠 = 2,860円 + 4,000円 = 6,860円

$$0.38 \times 6,860円 = 2,606円$$

ケース3. 2根抜髄+乳歯冠 = 2,650円 + 4,000円 = 6,650円

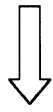
$$0.38 \times 6,650円 = 2,527円$$

ケース4. 単根抜髄+乳歯冠 = 1,430円 + 4,000円 = 5,430円

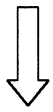
$$0.38 \times 5,430円 = 2,063円$$

③ 費用対便益比

ケース1.	1	:	1.02
" 2.	1	:	0.78
" 3.	1	:	0.75
" 4.	1	:	0.62



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



愛知県尾張旭市で実施しているフッ素塗布を中心とした歯科的なう蝕管理の効果は、その管理を早期に開始し、かつ指導及び予防処置を受ける回数の多い程高くなることを昨年報告した。